

インプラントと天然歯の治療における ハニガムプロの活用

平塚 智裕 Bcデンタルオフィス／東京都品川区開業

はじめに

再生が期待できない歯質または歯それ自体を補うために、間接補綴修復物は必要である。口腔内情報をいかに正確に口腔外へ伝達するか、この方法はデジタル技術の発展により選択肢は増えている。しかしながら、従来型の材料を用いた印象方法による成果をまだ網羅できていないため、シリコーン印象材の役割は歯科医寮において未だ大切な地位を占める。

印象材に求めるもの

(精度、弾性、稠度、流動性、親水性、硬化時間、寸法安定性)

印象材に求めるものは、簡単にいうと使いやすさである。操作性がよく、精密な再現性があり、模型にするまで安定している。今回、ハニガムプロを使用してみて、使いやすさを感じた。臨床におけるこの直感は大変である。集中下の診療において、いかにストレスなく操作ができるかは、治療の質に関わることである。

ここで各性質を考察してみる。細部に至るまで印記される精度が高いこと。アンダーカットがある口腔内において、患者に不快感を与えることなく印象体を撤去でき、その際に印象材が千切れることがない適度な弾性を持つこと。口腔内は湿潤下にあるため、親水性かつ注ぎやすい稠度であること。印象材注入時から硬化するまでのバランスがよい硬化時間と硬化曲線であること。印象採得した時点から技工所に届くまでの時間が経過しても、石膏

を注ぐまで寸法安定性があること。これらの観点から、ハニガムプロは優れている印象材であると実感している。

インプラントと天然歯が混在した症例にハニガムプロを使用した症例

天然歯よりも動きがほとんどないインプラント技工において、技工精度に関わる性質はとても大切である。インプラント間の位置にズレがあると、特にスクリー固定に

した場合、スクリー締結時に構造体に応力が加わることや、構造体のコンポーネント間に隙間を生じることになる。そのため、インプラント治療の模型作成に関わる材料の選択は大切である。写真のように2本のインプラントと天然歯が混在している症例で、印象から完成まで同時に行ったが、インプラントと天然歯ともに良好な経過を示した。複数のインプラント症例においても良好な結果であった。

まとめ

デジタル化が進んでいるが、特に複数の天然歯あるいはインプラントを連結する補綴修復物作成の再現性において、従来のシリコーン材での印象採得は未だ勝っている。ハニガムプロを使用した実感として、各性質に優れており臨床に広く応用できる印象材である。

図1 ハニガムプロ



症例に応じて、ハニガムプロ ライト・ヘビー・パテソフトを使い分ける。

図4



ガム模型を付与したインプラントと支台歯の石膏模型。

図2



インプラント2本と天然歯の支台歯が隣接して混在し、同時に補綴装置を作成する症例。

図3



インプラントと天然歯が隣接して混在する症例の印象採得。印象用トレーのクリアランスが大きいインプラントがあると、隣接する天然歯に印象圧がかかりにくい場合、印象の再現が困難になる場合があるが、ハニガムプロでは良好に歯肉線下まで印象が再現できている。

図5



支台歯の部分のみピックアップして作成した模型。細部まで再現されている。

図6



支台歯とインプラントは製作工程が異なるため、異なる作業用模型と共通の模型を使用して作成していく。

図7



共通の作業用模型で調整が終わった、天然歯とインプラントの最終補綴装置。

図8



口腔内に装着された最終補綴装置(咬合面観)。模型で作成された補綴装置は口腔内に良好に適合している。

図9



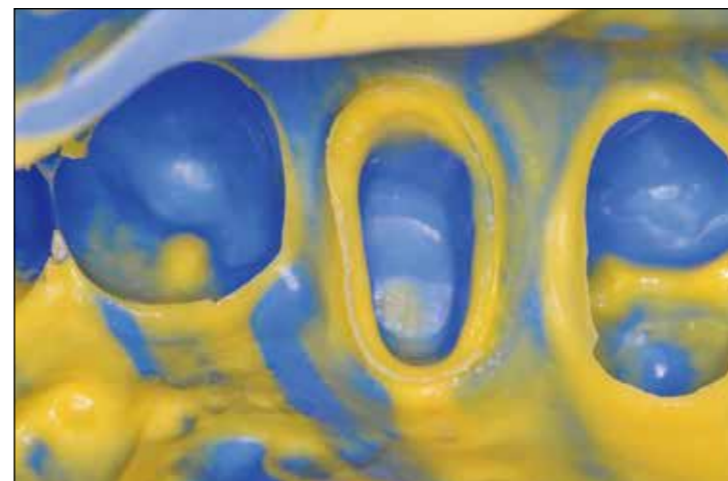
口腔内に装着された最終補綴装置(側方面観)。模型で作成された補綴装置は口腔内に良好に適合している。

図10



個人トレーにライトボディとモノボディタイプを使用。ハニガムプロにはライト、モノ、ヘビー、パテタイプがある。用途に応じて組み合わせを選択するが、それぞれが良好な調和を示した。

図11



右上4番。天然歯支台歯に使用しても、歯肉線下まで良好に再現されている。

図12



天然歯クラウンの口腔内装着時、良好な適合状態であった。